

研究・調査報告書

報告書番号	担当
175	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳) Stimulant use trajectories and the longitudinal risk of heavy drinking: findings from a rural population-based study. 麻薬の使用方法与多量飲酒との予後：田舎でのポピュレーション研究からの知見	
執筆者 Borders TF, Booth BM.	
掲載誌 Addict Behav. 2012 Mar;37(3):269-72.	
キーワード 麻薬、コカイン、メタンフェタミン、飲酒日数、地方	
要旨 目的： 現存している文献では、特に地方での麻薬使用者における長期間のアルコール飲用に関する報告がほとんどないが、麻薬の使用が減少すると、それに伴い多量飲酒が増加するということが信じられている。この研究の目的は、多量飲酒の日数と潜在的なコカイン、クラックコカイン、メタンフェタミンの使用との間の縦断的な関係を検討することである。 方法： 3州における各3つの地方において710名の参加者が集められ、3年間、6ヶ月毎に聞き取り調査が実施された。LCGA(潜在階層成長分析)によって粉状コカイン、クラックコカイン、メタンフェタミンの使用量の潜在追跡階層が決められた。GLM(一般化された線形モデル)によって、これらの潜在階層が過去30日間における多量飲酒日数と関連するかを検証した。 結果： 交絡因子を調整後は、多量飲酒日数は有意に変わらなかった。クラックコカインの使用量が「低くなった」群の追跡結果と比較して、「定常的に高い」群もしくは「減少している」群では多量飲酒日数が多かった。粉状コカインの使用量が「低くなった」群の追跡結果と比較して、「定常的に中等度」の群では多量飲酒日数が多かった。メタンフェタミンの使用量に関する追跡結果では、多量飲酒日数とは関連が認められなかった。 結論： 多量飲酒は、地方の麻薬使用者で全期間を通してほとんど変化がなかった。多くの地方のコカイン使用者は、多量飲酒を減少させることを目的とした介入で改善の機会を得る可能性があるかもしれない。	